

特集

知ろう・つながろう
渋谷の居場所

～①子どもの居場所～

今回のテーマは「子どもの居場所」です。子どもたちにとっての障がいのある人との関わり方や地域とのつながりをどのように作っているのか、どのようにアプローチすることが大切なのかを取材を通じて考えていきます。

今回は、工房ぱれっとの「出張工房ぱれっと」などでお世話になっている、「渋谷東しぜんの国こども園」の園長である名古屋彩佳さんにお話を伺いました。こちらのこども園は渋谷ブリッジという、かつて東横線が走っていた線路跡地に作られた建物の中にあり、開放的な作りかつ地域住民や通行する方がふらっと立ち寄れる場所になっています。こども園の1階には、カフェ(small alley cafe)や子育てひろば(BUTTER)がありそこでは定期的にイベントが開催されていてぱれっとも以前「ハイ!カモン!」(※¹)でお世話になりました。そこから引き続きつながりがあり、現在は毎週火曜日に工房ぱれっとが子育てひろばの場所をお借りしてぬいぐるみ(らぶらび等)作りの作業を行なっています。

●障がいのあるメンバーとの関わり

名古屋さん はじめは園児たちが同じ場に行くというより、作業場だけのスペースでした。そんなとき、園児の一人が(こども園の活動の中で)人形劇をやりたい!となり、じゃあ下でうさぎさん(らぶらび)作っているから行ってみようか!となり、その子がうさぎさんを連れて帰って

きたのを見て、他の園児もこれほしい、私も作りたい!とどんどん下に降りて交流するようになりました。定期的かつ継続的に作業スペースとして、来てくれていることで、関わりを作ろうと無理やり園児を連れていくのではなく自然な流れで、子どもたちが行きたいと思ったときに関わる事ができています。

Q-園児の皆さんの様子はいかがですか?

名古屋さん 子どもたちは抵抗なく関わっていて、病気や障がいがあるという感覚ではなく、そういう人もいるんだと捉えています。作業している中で時々大きな声に驚いて泣いてしまう園児もいますが、それもいい経験だと思っています。

渋谷には多様な人がいるからこそ、子どもたちともたくさん関わってもらい、いろいろな人がいることを知ってもらいたいですね。子どもは大人よりよっぽどそれぞれをカテゴライズしていないので、我々も学びになります。

●こども園周辺の地域との関わり

名古屋さん このこども園には園庭がありません。しかしそれをポジティブに捉えて渋谷の街を園庭として「まち歩き」を行なって

います。大人にとっては何てことない場所も子どもたちにとっては魅力的な場所となります。これは何だろう?やってみよう!と自分たちの街として遊んでいます。卒園した後もこの渋谷に住んで、大人から離れて自分で生きていくようになった時に、危険な場所や安全な所などこの街について分かってくること、安心して生きていけることを願っています。

Q-こども園は地域にとってどんな場所でありたいとお考えですか?

名古屋さん 大人中心の社会から少し視点を変え子どもを真ん中に置いて一緒に語り合ったり、子どもと近くに住む人や働いている人をつなげる役割になりたいです。保育園は不審者などが入らないように閉ざされがちな場所ですが、ここは1階のスペースなどを利用して地域の人々の交流の場としても開けるようにしています。ここは、渋谷の東側にあるので商業施設だけではなく、昔から住んでいる人も多くいて関わり合いができていいと思っています。

Q-どのような関わりがありますか?

名古屋さん 1階にカフェがあることで、こども園とは関わりがない人でもコーヒーが好きで立ち寄ってくれて子どもたちとの交流ができ、ここの存在

を知ってもらえています。その他にも、渋谷区社会福祉協議会主催の「シブヤロコミュ」(※²)に参加をしている関係で、地域の話し合いの場としても活用してもらっています。面白い企画と一緒に考えたり、こんな場所があったらいいなどを話したり、いいきっかけになっています。

●つながりを作るためには

Q-いろいろな人が関わることで意識していることはありますか?

名古屋さん 月に1度、1階の子育てひろばで小学生を対象にしたおやつ会を行っていて、大学生や高校生などボランティアの方にも参加してもらっています。特に重要な場面以外は、ボランティアの皆さんにお任せをしています。職員間でもかっちりしたルールは決めておらず、新しい人が来た時にもこちらが柔軟に対応できるようにしています。

Q-活動の中でのエピソードを教えてください。

名古屋さん 近日開催予定のイベントでもおにぎりを作るのに、ご近所のおばあさまがたくさんもらったお米があって、食べきれないからと持ってきてくれることになっています。ご高齢の方の話はなかなか聞く機会がありませんが、開けた場所や話すきっかけがあるだけで、関わりが広がると実感しています。

Q-名古屋さんにとって居場所とはどんなところですか?

ある研究の中で語られていたことですが、両手を広げて羽を伸ばした時に自分1

【インタビューの様子】
(左:名古屋さん)



人なら横に腕をいっぱい広げられる空間があるけど、その隣に同じことをしたい人がいるとぶつかってしまいます。その時、手と手がぶつかってしまうことも心地よさを感じるために必要なことで、それがなければ心地よさを感じられない。

しかし、それぞれが手を伸ばしたいと思った時は伸ばせる、そんな空間があることが必要であること。また、少し互いに縮こめて空間を共にする日もある、そんな風に調整できることが居場所となるためには大切なのではないかと考えています。

●取材のまとめ(武井)

当日はこども園全体での夏祭りが開催されていました。取材中も廊下を子どもたちが神輿を担いで通ったり、事務室からアナウンスを流す子どもがいたり、とても皆が生きいきとしている様子が伺えました。園内は壁や柱が少なく、窓ガラスが多いため開放的な作りになっています。1階にある子育てひろばも通路側が窓ガラスになっているため、通行人からも中の様子が見えます。出張工房ぱれっとの際も、通りがかりの方が気にかけてくれたり、中に入って一緒に交流したりと関わりの幅が広がっています。同時にぱれっとの他の活動に関しても知って頂くことができ、障がいのあるメンバーへの理解も深まっています。

地域の人に参加しやすく、子どもたちとも関われる環境を作ることは、受け入れる側が柔軟に対応できる体制を整えること、新しく来る人も居心地のいい場所で過ごせるように、それぞれの動きに任せることが大事だと学びました。たまり

場ぱれっとの活動でも、開放日や宿泊行事のイベントでは世代を問わず様々な人が参加してくださっています。それぞれの思いを受け入れるためにも、参加する人と一緒に環境を作っていくことが求められているのだと感じました。また、今回の取材では職員同士のコミュニケーションの取り方や保護者の方との関係性作りについてもお話していただきました。意見交換の場などでは、経験の長いベテランの方や年長の方がたくさん話してしまいがちですが、若手や経験の浅い方が「分からない」こともベテランメンバーが若手の意見も引き出すようにしているということでした。分からないと気づいたことで新たな発見につながるのではないかと思います。

ぱれっとでの活動を行なっていく際も皆にとって居心地の良さをつくるために参加する人のそれぞれのニーズを受け止めて関わり合いを作っていきたいと思います。また今後の活動では、こども園で行なわれている「まち歩き」などの活動やその他のイベントでもぱれっとの参加者と一緒に企画をして、お互いの新しい発見や可能性を見出していきたいです。

(たまり場ぱれっと 武井 琴美)

(※¹「ハイ!カモン!」:2021年12月に行なった、工房ぱれっとの作品展覧会やワークショップイベント)

(※²「シブヤロコミュ」:令和4年度から渋谷区社会福祉協議会が推進する重層的支援体制整備事業の取り組み)